

# 保育者志望学生の絵本の読み聞かせにおける 意識に関する考察

－保育内容「言葉」の観点から－

明星大学教育学部教育学科	非常勤講師	林	亜 貴
共立女子大学家政学部児童学科	助教		
明星大学教育学部教育学科	特任准教授	北相模	美恵子
明星大学教職センター	実習指導員	宮 本	実 里

## A Study on Consciousness in reading picture books to children of students majoring in early childhood education

: the viewpoint of language development in early childhood

Hayashi Aki  
Kitasagami Mieko  
Miyamoto Minori

抄録

本研究では、保育者志望学生の子ども理解や保育観が表されているだろう絵本を読み聞かせる際に作成する指導案のねらい部分を分析することで、学生の認識変化を確認し、今後、必要となる指導内容について明らかにした。その結果、専門科目や実習指導を経ることで、学生の意識が子ども「個」への願いから「子ども集団」への願いへ変化していくことや、発達理解を踏まえて「ねらい」を設定することの重要性に気づいていることが明らかになった。今後の実習指導の充実のため、学生がより具体的な子どもへのイメージを持った上で「ねらい」を定め立案できるよう指導することが示された。

キーワード：保育内容「言葉」、テキストマイニング、絵本の読み聞かせ、保育者志望学生

### 1 問題と目的

保育者を志望し保育士養成課程のある4年制大学に入学してくる学生は、職業としての保育者に憧れや希望を持ち入学してくる。入学後の志望動機にも、自身が保育された経験や中学生時の職場体験などにより、保育者の姿に憧れを持ち志望したことがしばしば語られる。しかし、大学入学後1年間は、カリキュラムの中で一般教養科目の割合が多く、具体的な保育者としての役割や子ども理解を学ぶ機会は少ないため、2年生進級時には具体的なイメージを持ってはいない状況が見られる。その状態から出発し、2年次以降、保育所実習を行うことになる。実習までにどのような学びを学生に提示していく事が、より学びの深い実習となっていくのだろうか。

本研究で取り上げる4年制大学保育者養成校における保育所実習は、2年次の2月に2週間行う保育所実習1と、3年次に保育所を選択した学生が2週間行う保育所実習2がある。2年次に行う保育所実習1では従来観察実習が中心であったが、近年の傾向を見ると日数や時間の差は実習園ごとに違うものの、子どもたちと実際に関わる機会を与えられる参加実習を行うケースが多くなっている。また、手あそびや絵

本の読み聞かせを課題として課される場合もある。2年次に、幼児理解の理論と方法や保育内容総論、乳児保育、障害児保育など、保育の専門科目を学び、保育についての理解を促してはいるが、言葉や人間関係など領域についての学習は3年次の履修となっており、実習時の学びとしては十分であるとは言えない。

保育所実習指導1の事前指導においては、具体的な実習イメージを持ちづらい状況にある学生に対して「絵本の読み聞かせ」の部分実習をすると仮定し、指導案作成及び学生同士の模擬保育を課題としている。また、実習を行っていない学生が指導案を立案するという授業内容について、先行研究から「指導案の立案は学生の多くが困難感を持っている事」という事が林(2017)によって報告されている。具体的には、実習前に「ねらい」を立てることの難しさについて「目の前に子どもがいない実習前の学生が子どもの実態をイメージし、保育者としての願いを踏まえてねらい、内容を考えることは難しいであろう」とされている。更に、その点を補う指導方法として「実践から保育指導案の立案」という逆の手順による指導を金(2017)は提案しており、実習前の学生に対する指導は、保育士養成において大きな課題になっていると言える。対象大学においては、指導案立案の学生にとっての難しさは前提としつつ、指導案立案の中で具体的に子どもに願いを持って保育していく事や、保育所という場や保育者の役割を理解していくことを目指している。活動の「ねらい」には、選定する絵本の内容及び選定理由が挙げられているはずであり、1年半の学びの中で学生が得た、子ども理解や願いが反映されているものと考えられる。そのため、この絵本選定のねらいについて考察する事により、学生の認識を確認し、今後実習に向けて必要となる学生への指導内容について明らかにする事を目的とする。

本研究で取り扱う絵本の読み聞かせの指導案は、幼児クラスでの保育所実習を見据えた内容である。改定により、5領域のねらいも見直され、3歳児以上の保育内容「言葉」のねらいは、幼稚園教育要領と整合性が意識され、以下のような内容となった。

経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。

(ア)ねらい

- 1 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- 2 人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- 3 日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。

(平成29年3月31日告示「保育所保育指針」より抜粋)

本研究においては、保育内容「言葉」に挙げられているねらいや内容を視点として考察していく事とする。

## 2 方法

### (1) 対象と手続き

都内4年制大学保育士養成校1年次学生23名、2年次学生64名が、授業内で作成した絵本の読み聞かせの指導案のねらいのみを抽出し、書かれている内容の比較を行った。以下、ねらいの1例を表1に示した。





表2 2年次学生のねらい内で用いられる単語の出現回数

名詞	出現回数	動詞	出現回数	形容詞	出現回数
絵本	38	できる	41	やすい	29
遊び	27	遊ぶ	33	多い	16
子ども達	23	待つ	26	楽しい	7
イメージ	20	しまう	16	大きい	7
気持ち	17	考える	15	ほしい	5
内容	10	楽しむ	15	寒い	3
楽しみ	10	感じる	15	良い	3
動物	10	知る	14	強い	2
集団	10	読む	13	よい	2
仲間外れ	10	増える	13	優しい	2
子ども	10	使う	12	新しい	2
クラス	10	出来る	12	嬉しい	2
相手	9	もらう	11	上手い	2
トラブル	9	分かる	8	短い	2
興味	9	いく	8	羨ましい	1
仲良し	8	続く	7	うまい	1
少人数	8	伝える	7	少ない	1
読み聞かせ	8	数える	6	薄い	1
年長	8	思う	6	あたたかい	1

⋮

「持つ」、「考える」、「楽しむ」、「感じる」などを含む、読み聞かせを行う上で子どもへの願いを表す記述が多くあった。

また、名詞に着目してみると、図解の結果から読み取れたように、「子ども達」や「集団」、「仲間外れ」、「クラス」、「相手」、「トラブル」、「仲良し」、「少人数」、「年長」と、出現回数上位19単語のうち、9単語が集団やクラスなど、同年齢の他者を想起させる単語であることが分かった。

### (3) 1年次学生と2年次学生のねらい設定との比較

次に1年次学生と2年次学生のデータを比較すると、1年次学生のものには「成長」という言語が出てくるものの、そこから同年齢集団を意識した広がりはなく、他者との関わりに関連した言語は「家族」や「お母さん」等、子どもに近い大人に留まっていた。

このことから、1年次学生から2年次学生へと専門科目や実習指導などの講義を受けることで、家庭的な子ども個に重きを置いた捉えから、個を意識しつつも集団の中で子どもがどう育っていくか意識していることが窺えた。

### (4) 保育所保育指針の保育内容「言葉」との比較

学生の設定した絵本の読み聞かせのねらいに、保育所保育指針・幼稚園教育要領の保育内容「言葉」のねらいの視点があるか照らし合せていった。「1 自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう」と「3 日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。」の「日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにする。」という点については、ねらい設定の中で多く取り上げられていた。

## 4 考察

### (1) 「個」への願いから「子ども集団」への願いへの変化

1年次の専門教科がほとんど入っていない状態の学生においては、「個」をより重視した「ねらい」になっており、保育の活動としての読み聞かせというよりは家庭の中など自身の経験した範疇にとどまり、「個」と「個」に意識が向いている。対して2年次の学生は、仲間関係やクラスなど子ども集団を意識した「ね



らい」に変化してきており、授業において子ども理解や子ども集団における子ども同士の関わりなどを学習してきたことが、影響を与えていると言える。つまり「個」への願いから「子ども集団」への願いへの変化が、学習によってもたらされていると言える。

### (2) 子ども理解を踏まえたねらいの設定

学生の具体的な記述を見てみると「もうすぐ年長になるという期待が膨らむ時期」「年上のクラスになり、自分のことばかりでなく、年下の子の面倒も見ることができるようになった。友達の気持ちもわかり、共感したり、自分の考えを持ち相手に伝えることができるようになった」「仲の良い友達と一緒に遊ぶことを楽しむようになってきているが、意見がぶつかり、喧嘩をしたり仲間外れになってしまう子がいたりする。クレヨンという身近なものが題材となっていることで、親しみやすく、子ども達の生活と置き換えて考えやすい」など、対象児の年齢設定に応じた発達状況を考慮して「ねらい」を設定しているものも2年次には多く見られている。この点から、発達理解を踏まえ、「ねらい」設定をすることの重要性に学生が気づいていると言える。

### (3) 子どもの姿を具体的にイメージ

指導案作成は、実際の子どもの状況を把握しない中で立案するため、架空であるからこそ「仲間はずれにしない」「トラブル」など集団の中での「個」という観点がより強くなるのは必然とも言える。しかし、保育内容「言葉」のねらいに照らしてみると、「2人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。」と「3 日常生活に必要な言葉が分かるようになる」とともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、保育士等や友達と心を通わせる。」のうちの「心を通わせる」という点に関しては、学生の考察にはほとんど触れられていない。この点の理解を促すために、あそびの場面や実際の読み聞かせ場面の映像を通して、子どもたちの状態や課題を自ら考察し判断し、より具体的なイメージを持った上で「ねらい」を定め立案することを、実習前学習に取り入れていく事が有効となっていくのではないだろうか。

## 5 まとめ

本研究では、学生が子どもに対して具体的なイメージを持てるよう指導していくことの重要性を示した。対象となった保育者養成校に研究結果をフィードバックし、それを踏まえた実習指導の在り方を模索していきたい。また、保育内容「言葉」に焦点を当て考察したことから、他の領域のねらいも加味して検討する必要がある。

### 引用・参考文献

1. 林理恵 (2018) 「短期大学保育学生の保育指導案作成に関する考察—幼稚園実習での学びに着目して—」, 幼年教育WEBジャーナル, 第1号, 17.
2. 金瑛珠 (2017) 「保育・教育課程を学ぶ授業における指導案指導のあり方についての一考察—順序性について考える—」, 未来の保育と教育 東京未来大学保育・教育センター紀要一, 第4号, 55.
3. 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針, 平成29年3月31日告示
4. 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領, 平成29年3月31日告示